ケシゴムは嘘を消せない

白河三兎

mito shirakawa

講談

講談社文庫

ケシゴムは嘘を消せない

講談社

|著者| 白河三兎　2009年『プールの底に眠る』で第42回メフィスト賞を受賞しデビュー。『私を知らないで』（集英社文庫）が「本の雑誌」オリジナル文庫大賞ＢＥＳＴ１に選ばれ話題になる。著書にはほかに『君のために今は回る』（講談社）『もしもし、還る。』（集英社文庫）がある。

ケシゴムは嘘（うそ）を消（け）せない
白河三兎（しらかわみと）
© Mito Shirakawa 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年1月15日第1刷発行

発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社デジタル製作部
印刷――豊国印刷株式会社
製本――株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277748-3

目次

ケシゴムは嘘を消せない　5
解説……大原まり子　282

講談社文庫

ケシゴムは嘘を消せない

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ケシゴムは嘘を消せない　5
解説……大原まり子　282

【十月十日（月）】

流れる水音で目を覚ます。トイレの音だ。いつの間にかソファで寝ていた。反射的に『加奈子（かなこ）か、悟（さとる）か？　どっちだろう？』と思ったが、二人がこの家にいるはずはない。半年も前に家を出て行き、昨日の十三時十五分に他人同士に戻ったばかりだ。

寝ぼけ眼で置き時計に目を向けると、まだ二十三時二十一分だった。前言撤回。離婚したのは昨日ではなくまだ今日だ。十七時頃から飲み始めたのだが、すぐに酔い潰れてしまったらしい。空けたビールは二缶だけ。疲れていたのだろう。

水音は夢か幻聴だ、と片付けてローテーブルに手を伸ばす。テレビのリモコンを手に取ったのだが、横にあった宅配ピザが残り一ピースになっていることを不思議に思った。そんなに食べたかな？　二ピースは食べた記憶がある、と思い出しながら電源

をオンにする。

ニュース番組で、日本各地で催された体育の日のイベントが報じられていた。和気藹々（あいあい）としている家族の様子は、今の俺の目には猛毒だ。

他のチャンネルに変えると、『カウパレードの牛が忽然と姿を消してから今日で二週間』と盗難事件の特集を報じていた。職場の近くで起こったことだから、少し気になっていた事件だ。

滑舌（かつぜつ）が不安定な女子アナのおさらいによれば、カウパレードとは一九九八年、スイスのチューリッヒで地元の芸術家が実物大の牛の模型にペイントや装飾を施し、パブリックスペースに四百頭を展示したのが始まりだそうだ。

それらの牛はカウパレード終了時に、チャリティーオークションにかけられたので、スポンサーや寄付金が集まった。また、多くの人が見物に訪れて多大な経済効果をもたらしたこともあり、ヨーロッパや日本でもそのアートイベントが行われるようになった。

日本では過去三回、二〇〇三年と二〇〇六年と二〇〇八年に東京の丸の内で開催され、成功を収めた。第四回のペインティングにも芸術家の他に、一般市民や学校や芸能人が参加している。

悟の小学校からも出展されていた。俺の勤務地が丸の内だから、そのうち見に行こうと思っていたのだが。子供や大人みんなが一生懸命に作ったものを盗むなんて、酷いことをする輩がいるものだ。

複数犯による犯行の可能性が高いらしい。一晩のうちに、展示されていた七十三頭全ての牛を運び去ったからだ。牛一頭の重さが約五十キロもあるので、単独犯では不可能に近い。

手がかりは何一つ残っていない。犯人の足跡ももちろん牛のものもない。テレビの中の大人たちは『組織的な犯罪か？　大掛かりな悪戯か？』と首を捻っていた。

俺は、牛が自由を求めて逃げ出したのかもな、と子供染みたことを思った。まだ酔いが抜けていないのだ。でもこれでいい。はなから今夜はぐでんぐでんになるまで飲むつもりだった。だが、そうなるにはまだ足りない。時間はたっぷりある。離婚式の続きをしよう。

俺は立ち上がり、キッチンへビールを取りに向かう。冷蔵庫からビールを二缶取り出し、リビングのソファへ戻ろうとする途中で、右足の裏にカップ麺のビニール包装がくっつく。いつもごみ箱に捨てずに放置しているので、部屋のあちこちに点在しているのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

加奈子が悟を連れて出て行ってから、すっかり男臭い部屋に変貌してしまった。いつ崩れても不思議ではない新聞紙のタワー。くたびれた衣服。日に日に積もっていく埃はすでに見過ごせないラインを超えていた。

元妻のことを想うと、必然と悟も登場する。加奈子が悟に過保護だったからだ。母と子のツーショット。自然な光景だ。半年前、最後にあの親子を見た時、母は頬を濡らし、子は頬を腫らして俺の脇をすり抜けて行った。

ちょうど今、俺が立っているところの横を通った。悟は俺の手を摑もうと腕を伸ばす。俺を通過してからも悟は体を仰け反らせ、手をバタバタさせた。加奈子に引き摺られるようにしながらも俺を求めていた。

もしもあの時に悟の手を摑んでいたら、と考えることがある。なんで考えてしまうのだ？　俺は何一つ後悔してない。あれは五十年後の自分にも誇れる正しい判断だった。

でも、あの瞬間に戻ることがあったら、『今度は悟の手を握るかもしれない』と思う自分がいる。女々しい自分にうんざりする。そんなことをしても、何も変わらなかっただろうに。むしろもっと事態は悪化していたはずだ。

俺は右足をバタバタさせる。両手が缶ビールで塞がれているから、足を振って踏ん

付けたビニールの包装を落とそうとする。でもなかなか取れない。いつまでも過去にしがみ付いている自分みたいだ。

サッカーボールを蹴るみたいにして大きく足を前後に振ったら、勢いをつけ過ぎたために軸足の左足が滑って尻もちをついてしまった。その衝撃で左手から缶ビールが落ちて転がる。欠陥住宅の床の傾きを証明するためのビー玉みたいにどんどん転がっていく。もう手を伸ばしても届かない距離だ。

転倒から数秒遅れで、新聞紙のタワーが崩れた。真っ直ぐな古新聞の列が部屋を縦断した。お尻はそれほど痛くはなかったが、涙が目尻に溜まる。

俺は空いた左手を使って足の裏のごみを取る。そして摘まんだビニールの包装に息を吹きかけて飛ばした。また踏んだら、その時はその時だ。

腰を上げ、転がった缶ビールを拾いに行こうとすると、俺の前を空気の塊が横切る。屋外だったら緩やかな風に感じただろう。エアコンのスイッチは入っていない。窓も開けていない。

疑問を抱くよりも先に体が反応した。素早く振り返り、その空気の中に左手を突っ込んだ。咄嗟に掴んだのは缶コーヒーほどの太さのものだ。それはほんわかと温かく、柔らかく、力を込めたら壊れてしまいそうだった。

女の手首だ、と経験が教える。女性特有の儚(はかな)い感触。でもあったのは感触だけだった。俺の手の中には何もなかった。

「見えるの？」

何もない空間から女性の驚いた声が発せられた。

「見えない」

「じゃ、なんで私を捕まえられたの？」

酷いしゃがれ声だけれど、張りはあり、若々しさを感じる。二十代くらいだろうか？

「いや、なんとなく」

俺は透明の手首から肘へ、肘から肩へ手のひらを這わせて、空間に人の形を確認した。服は着ているようだ。

「急いでる？」と俺は訊く。

「はい？」と見えない女は第一声よりも驚きの声を上げた。

「暇なら飲まないか？」

「他に言うべきことがあるんじゃない？」

「そっちも色々と事情があるんだろうけど、こっちも自分のことだけで手一杯。びっ

くり仰天するのはまた別の機会にするよ。とにかく今夜は一人で飲みたくない気分なんだ。でもあいにく相手がいない」

離婚が成立した日の夜に、友達や同僚の慰み物になりたくない。簡単に言えば、格好悪いところを見せたくないのだ。

でもやっぱり一人でいるのは辛い。夜の街に繰り出して適当な相手を見つけるよりは、眼前にいる（と思われる）得体の知れない女の方が手っ取り早いと判断した。

「一人で暮らしているの？」

「見ての通りだ」

「確かに散らかり放題ね」

女の息がビール臭いことに気付く。喋り方に浮遊感が含まれているから、酔っているのかもしれない。思い返してみると、冷蔵庫に入っている缶ビールの本数が少なかったような気がする。どうでもいいことだが。

「不潔な部屋が嫌なら、今すぐにでも掃除するけど」

「潔癖症の男の部屋よりはマシだけど……」とどこか歯切れが悪い。

「ひょっとして幽霊だから飲み食いはできないのか？」

「生きているわよ。ちゃんと足があるじゃない」

「見えない」

「冗談よ」と茶化した。

電話と同じだ。相手の姿が見えないと、冗談と本気の区別がつき難い。

「付き合ってくれるなら、そこのソファに座ってて」と俺はチョコレート色のソファを指した。

それからキッチンの隅にまで転がった缶ビールを拾い上げる。リビングに戻ると、やはり誰もいなかった。さっきのは幻聴だったのかもな。睡眠不足。アルコール依存。心身ともに病んでいる。幻覚や幻聴があっても不思議ではない。

「やっぱり見えているの？」

俺がソファの右側に座ったと同時に隣から声がした。どうやら俺は酔っ払っているわけでも、夢を見ているわけでもないみたいだ。

「見えない。たまたまだ」

この革張りの二人掛けソファは右側が俺の所定の場所になっている。女が偶然左側に座っていたから、女の太腿の上に座らずに済んだ。

「本当みたいね。今、私はこの世のものとは思えないほど面白い顔をしているのに、ピクリともしない」

「残念ながらあんたの顔芸は楽しめない」と女の前に缶ビールを差し出す。

俺の隣には人影はない。だから九ヵ月前に悟がソファで嘔吐した時にできた染みが目に付く。宙に掲げた缶ビールから手を放すと、重力に従いバスンとソファの上に落ちる、そうなることを心の片隅で望んでいた。

しかし缶ビールは空中に固定され、自然とプルタブが起き上がり、泡の弾ける音が聞こえた。

「あんまり見つめないで。顔が赤くなっちゃうじゃない」と女はもっともらしい口調で言い、缶ビールを俺に近付けて乾杯を待つ。

見とれていた俺も急いで缶を開けて女の缶に押し付ける。

「乾杯」と言い合う。

ビールに口を付けようとしたが、女の飲み方に目を奪われ、目測を誤った。飲み口を顎に当ててしまい、胸元にビールがかかる。よそ見の原因は、黄金色の液体が女の喉元を通って胃袋に流れ落ちていくのが見えたからだ。

俺の視線に気付いた女は「こりゃ、失礼」と詫びると、飲んだビールを消した。胃袋にあったと思われるビールが突然なくなったのだ。そして手にしていた缶ビールも消す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com